

理事長所感（3月）

陽春の3月となりましたが、新型コロナウイルス感染症の流行の兆しが春の日差しを遮る黒雲のように、じわりと広がってきました。

そのため、マスク姿やアルコール消毒液の散布が日常茶飯となり、レストラン、シネマなど普段人込みで賑わう場所も閑散とするなど例年の3月からは想像もできない風景が広がっています。

さらに、イベント、コンサートなどの中止も相次ぎ、無観客でのスポーツの試合やファッションショーが行われるなど景気の行方にも深刻な影響を与えるのではないかと懸念されています。

現時点の関心事の1つは、新型コロナウイルス感染症の流行の終息の時期は何時頃かということですが、残念ながら、終息の見通しが見えてこないというのが実情で、東京オリンピック・パラリンピックの開催まで危惧されるようになっていきます。

関係者のご苦勞やご心配もいかばかりかと思われまます。

今となってはせん無いことですが、何とか初期段階での封じ込め作戦や水際作戦が上手くいっていただと思うところです。

危機管理のエキスパートだった佐々淳行氏は、危機管理の要諦（ポイント）として、大要次のように述べておられます。

- （1）悲観的に準備（最悪の場合を想定して準備）して、楽観的に対処せよ
- （2）小出しの対応（piece meal attack）を避けよ（思い切って大げさな位の対応をせよ）
- （3）司令塔を高く掲げよ（大きな権限を有する者をトップにした対策本部にせよ）
- （4）トップダウンで決断し、決定せよ

危機管理の本質を突いていると思われまますが、なかなか現実の対処は理論通りにはいかないというのが実情のようです。

かつて SARS が大流行した際、こんな話を聞いたことがあります。開発が進んで野生の蝙蝠の生息域が狭くなったので、蝙蝠に寄生していた細菌が、減少し続ける蝙蝠に代わる新しい宿り主として、増え続ける人類に寄生するようになったという説です。

今回のコロナウイルスも蝙蝠から人へ転移したと言われていいますので、同様の仮説が成り立つかもしれません。

この仮説の正否はともかくとして、乱開発による自然の生態系の破壊は思いもかけぬ事態を呼ぶことになると思われまます。この点で、先日のオーストラリアの山火事による大規模な森林喪失による生態系の変化に伴う影響も懸念されるところです。

わが国では、山林を守るために、NPOの手による被災林や皆伐放棄地へのプレゼントツリー（記念樹）を植えるプロジェクトや間伐などの丁寧な手入れによる「百年の森」事業など新しい取り組みが始まっており、当協会の研究委員会報告書で紹介しています。

理事長 平谷 英明